如何に "Daisy Miller" は改訂されたか

—— Henry James の文體論 ——

速　川　　浩

1 章　Daisy の性格について
2 章　Reporting verb その他
3 章　語の特種化と分化
4 章　Image について
5 章　Americanism と slang の增加
6 章　文 章 論
7 章　改作是非論

Henry James (1843—1916) はその長い作家生活の後期である1903年から1909年の間に作者自身の選擇により二十四卷の全集を米國は Scribner から英國は Macmillan から出版した。所謂確定版と稱せられる物で，各卷に長文の序文を附け，初期作品には多くの朱筆を加えた。1903年と言えば彼の後期の傑作 The Wings of the Dove (1902), The Ambassadors (1903), The Golden Bowl (1904) の書かれた年に前後し，最も油の乘り切つた絕頂であるが又所謂 James 風の特異な文體を完成した頃でもある。一體彼の作品を概觀して初期の平明卒直な文體から後期の複雜微妙なそれへの變貌は彼を愛讀研究する者達には常に興味ある問題であるが，初期作品の如何なる點に最も多く彼

日本で出ているテキストは殆ど初版に據つている。入手の便宜から研究社英文學叢書（福原麟太郎師註）同小英文學叢書（西川正身氏註）を選んだ。共に全頁行が同じである。改訂版は校合したのは Macmillan 社の James 全集の一册である。前述の本の序文に西川氏は二つのテクストの比較研究を薦め，又福原師は早くその研究をされたが火災により業を中止された事を述べられている。略符。初版＝O，改訂版＝R。僅かの補正ですんだ部分は初版の文を基本に擧げ（　）內の語は改訂版では除かれた個所，イタリツク文字は加筆を意味する。O のページ數に2又は3を加えたのが大体 R の該當箇所に當るので簡單な引例では O のページ數のみを示した例も多い。

の朱筆が振われているかを知る事は同時に James の創作態度，スタイルの變遷を最も明確に知る鍵となる。この様な意味で私は初期作品中より中篇ではあるが珍しく多くの本國の讀者を得た作品，又吾國では殊に愛讀されている，Daisy Miller (1878) を選び初版と改訂版とを比較檢討して見たいと思う。(註1)

1章　Daisy の性格について

この作で第一に問題となるのはヘロイン Daisy Millerの性格で，果して彼女が innocent な少女であるか否かは最後まで讀者及び青年紳士 Winterbourne を迷わせる。Winterbourne は最初こそ彼女の並外れた振舞に幻惑されるが，やがて彼女の innocence を確信し，伯母にもその點を辯護力說する。"They are very ignorant—very innocent only".(p38) 然しイタリー人の從僕 Eugenio や，怪しげな紳士 Giovanelli 等との常軌を逸した行動に —— a belief in Daisy's "innocence" came to seem to Winterbourne more and more a matter of fine-spun gallantry. (p67) と感ぜられて來るが，月明の夜コロセウムの廢墟に逢引する彼女を見て遂に彼女の正體を見遂げたと思い救いがたい女と思いあきらめる。然し彼女の墓前に當のイタリー紳士から繰返し，"She was the most innocent" (p76) と打明けられて卒然と己の誤を既に時遲く知るのである。この様に innocence は Daisy の重大な性格の一面であるがもし之だけであつたら彼女は通俗小說に出沒する純情可憐の ingénueの一人に過ぎない。所が彼女には特異な半面がありそれが彼女の性格を複雜にする。作中の語を以てすれば combination of audacity and innocence (p49), an extraordinary mixture of innocence and crudity (p35) the same odd mixture of audacity and puerility (p62) なのである。今 Jamesの加筆の跡を辿つて見ると前半面の innocence 方面には薄く，後半面に多くの關心を向ける樣に讀者に要請していると思われる筋が見える。

先ず彼女の根性曲り，天の邪鬼を力說する爲に初版にない perversity なる語を四度も挿入する。perversity とは Poeの The Imp of the Perverse によれば to perpetrate some actions merely because we feel we should

not. (してはならぬと思うと一層やりたくなる心情) である。

Daisy turned away from Winterbourne, (looking at him, smiling) (p30) → *all lighted with her odd perversity.*

She would say something (to commit herself still further to that "recklessness") (p53) → *still more significant of the perversity.*

その他 *She still more perversely pursued* (R.p73) a young lady *about the shades of whose perversity* a foolish puzzled gentleman need no longer trouble his head or his heart (R.p74) 等といずれも Daisy を説明する箇所にこの語が使われる。

次に彼女の強い性格の現れとして彼女は他人に干渉もせぬかわり，他人からの干渉も受付けない態度は "I have never allowed a gentleman to dictate to me, or to interfere with anything I do" (p47) という言葉に良く窺える。したがつて他人の毀譽褒貶いずれにも she was clearly neither offended nor fluttered.(R.p9) both his audacity and his respect were lost upon Miss Daisy. (R.p14) と平然たる有様である。この點 Daisy は The Portrait of a Lady.のIsabel Archer の先驅者である。James の加筆はこの面を強調する爲にも多く動いた。あたりに人なき態度は the young lady turned again to the little boy *whom she addressed quite as if they were alone together.* (p6) Daisy (repeated) *went on as if nothing else had been said.* (p28) の様な追加となる。更に次の様な平然さを現す副詞が多く加えられる。placidly (Rに2回，Oにも2回ある) imperturbably, blandly, colorlessly, undiscourageally impartially. 等々皆この系統の語である。又渦中から離れて冷然たる態度は with lovely remoteness とか the most "distant" American girl. (R.p9) の様な距離感の語となる。Wの伯母が頭痛持ちときいて言う Daisy の言葉 "But I suppose she doesn't have a headache every day," she said sympathetically" (p22) の最後の sympathetically を改版では除いてあるのは副詞を増しこそすれ減多に減らした事のない彼であるだけ暗示的である。この性質は Daisy だけでなく Miller

一家の家風なのであろうか母親も又心を惱しながらも子供達のする事に干渉しない。之を表現するのに James は fatalist なる初版にない語を持ち出す。かくて Daisy は exquisite little *fatalist* (R. p23) となり，母親は惡戯つ子の Randolph が寐なくても confess to the same mild *fatalism* as her daughter (R. p27) であり，more of a *fatalist* apparently than ever (R.p42) となる。

第三に Daisy は前より一層活潑で攻勢を示す。それは敵手たる the voice of civilization と稱する Mrs. Walker 等の社交界の面々が Daisy 一家を見る眼が峻烈に變つた事の反映でもある。兩者の關係は the challenged girl 對 poor pursuer (R.52) なる語に良く現われている。夫人等の口に掛つては Daisy も the young person (36) より the little abomination (あの罰あたり) に下落するし，彼等の会話には firmly asserted とか without mercy とか容赦ない語調を示す言葉が加わる。Daisy の母親やイタリー人達まで毒舌の飛つ散りを喰い *blatantly* imbecile mother (50. がなり立てる薄野呂な母親) her *unmistakably low* foreigners (38) the regular Roman fortune-hunters *of the inferior sort* (38) の如く白眼視される。この攻勢に對し一人敢然と應戰するのは Daisy であつて，たとえば Mrs. Costello が病氣を口實に彼女との面会を謝絶する事を知つても前には gave a little laugh (22) 位ですました物を今度は quite crowed for the fun of it (いかにも面白そうに鬨の聲を上げて笑う) のである。同様に先に urge した所は insist し (24), exclaim した所は wail し (30), gently に言つた所は with spirit (72) で言い，murmur した所 (28) は piped from a considerable distance (遠い所から疳高く) 物を言う等万事にぐつと强氣に變つている。

又 Daisy は前より一層皮肉で嘲笑的な言動に出る。その事は單的に次例中の mock, irony, derisively, synical 等の語の追加によつても明かに窺われる。

Daisy went on.(29) ⟶ Daisy agreeably *mocked.*

She only stood there laughing. (29) ⟶ She only remained an

elegant image of free light *irony.*

cried the young girl (45) ⟶ she *derisively* cried.

He remained grave indeed under the shock of her *synical* profession. (p59. 16の次の追加) この様に冷笑的な面を強調するのは如何な物であろうか。この小説の冒頭に Daisy が始めて登場した時 Winterbourne の口を藉りて in her bright, sweet, superficial little visage there was no mockery, no irony. の様に言わせているのと若干のずれが感じられる様に思う。彼女は意地張りであつても良い，平然たる所があつても良い，強氣であつても良い，それらは皆飾らない innocence の別な現れ方であるから。然し冷笑的な態度とは素直な感情でなく一通りにも二通にも頭でひねつた代物である。人は自己の優勢を自認した時にのみ相手を嘲笑し得る。勿論戀人を焦らす程度の皮肉もあるが Daisy の皮肉はそれ以上痛烈である。性格上の多くの缺點にもかゝわらず猶讀者にこのヘロインに對する同情を失わせない物があつた，(それ故にこそこの小説が比較的一般に愛好されたのであろう) が，そうした Daisy の姿が改作で少し崩れた感のあるのは私だけにであろうか。それはいずれにせよ，この意地張りで強情で嘲笑的でさえあるのは Daisy の一種の身構え，pose であり，折々この pose が崩れて思いがけない生地を示す事がある。それは多く Winterbourne との交渉がある危機に臨んだ時である。即ち彼がローマへ歸ると言つた時の歸路の車中での quite distractingly passive(R.38)だつた彼女，Giovanelli との仲を戀愛まで進める氣かと問われて blushing visibly し，彼に sparing but a single small queer glance for it, a queer small glance, he felt, than he had ever yet hed from her. (R.62) した彼女 (この箇所，初版では giving her interlocutor a single glance と簡略)，又コロセウムの逢引を彼に見咎められて "I don't care," said Daisy, (in a little strange tone) *unexpectedly cried out,* "whether I have Roman fever or not!" (74) 等の彼女である。彼女がこの好青年に如何なる感情を持つていたかは臨終に母親に殘した言葉以外には一度も告白が行われず，却つて彼に会うと一層遠慮なくすね，じらし，皮肉を浴せる態度に出る爲，ついに彼自身も

生前彼女の眞情を知り得なかつた。然し死後になつて讀者が彼と共に思い當るのは以上の際に彼女が示した意外にか弱い女らしい姿である。この場面には引用以外にも長い追加が行われ James はこの點に懸命の暗示を與えている樣である。

2章　Reporting verb その他

次に reporting verb や reporter の問題を考えて見よう。もし会話が完全に理想的に行われたならば，その会話だけで對話者の感情も意圖も總て察知され何等それ以上余分の說明的補足は不要な理である。劇で Mr. X:"——."と記錄する順序を少し變えて "——," said Mr. X. とするだけで足りる。いや人物の少い時はその人名さえ不要である。Hemingway の初期作品等は全く「character をして言わしめる」その方針を嚴守している。たとえば The Killers には殆ど全篇が会話で成立つているがその三分の一近くは唯引用符號に圍まれて對話者の標式もない剝出しの会話，殘り三分の二の殆ど全部九十數例は裸のまゝの said he. の絕え間ない反復である。その外には僅かに asked が五回，called が二回，explained, went on が各一回あるだけでいずれも何等の感情的說明語を伴わない。此は目に見え耳に聽える物のみを記錄しようとする徹底的な客觀描寫の態度で，所謂 hard boiled な文體の極端な一例であろう。之に對し James の使つた reporting verb は初版に於て既に次の樣な變化に富んでいる。

said系統：said, went on, observed, resumed, explained, announced, added, assented, continued.

asked系統：asked, inquired, demanded.

cried系統：cried, declared, ejaculated, exclaimed, proclaimed.

answered系統：answered, rejoined, replied, returned.

その他 pursued, urged, murmured.

先の Hemingway の例と比較してラテン系のシノニムを使つて變化に富む事は一目瞭然であろう。然し種類こそ多いが之等の語は特別な感情を盛つてい

ない平板無色の語である。勿論之に感情を示す副詞が付く事も多いが改版に比べたなら問題にならない程稀である。

それが改版では第一に舊版の said が次の様な語に替えられる。pursued, persisted, ventured, dropped, allowed, protested, rang out. これらの語は既にそれぞれ若干の感情を表明する語である點が前と異る。即ち persisted は obstinately に言う事, ventured は boldly に言う事であろう。

然しそれだけで濟まず更に何等かの感情を示す修飾語が加えられるのが普通である。即ち初版では單なる同じ said で片付いて居た物が如何に多くの修飾語を荷つて現われるかを見よう。

artfully proceeded, quite as naturally remarked, beautifully answered, declared with spirit, amiably whined, gayly returned, resentfully remarked. の如く副詞を伴うか、

hastened to reply, emboldened to reply, hastened to remark の如く動詞と共に用いられる。

更に一層複雜な物は數節數行の筆を加えて話者の口調表情態度或は胸中に秘められた感情まで表出するのである。Baker は Hemingway と James の会話を比較し，その傳達句に於て前者は全くのブランクであるに對し，後者は舞臺まで乘り出して俳優に指圖を與える監督にたとえている。(註 2) 一つには James の人物の性格感情は Hemingway のそれよりは遙かに複雜微妙でその陰影を徹底さす爲に大童であるとも言えようがこの事の善惡は最後の章で述べるとして次に傳達者に一寸注目して見よう。

原作の人名は次の様に書修されている。Daisy は that lady, the young girl, the challenged girl, the young woman held in horror by that lady, his little friend the child of nature of the Swiss lakeside となり Winterbourne は the young man, his friend, our embarrassed young man; Mrs. Walker は her hostess, poor pursuer, the author of his sacrifice ; Giovanelli は the subject of their contention, her coxcomb of the Corso の如くである。此等は一には人名の重複を嫌う變化の爲もある

が又色々の面を持つ個人をその場面で要求されている役割に制限する意味もある。たとえば said our embarrassed young man. (R.66) は原作の said Winterbourne よりは制限指定を受け，結局 said W. embarrassed に相應すると考えると矢張り作者の指示が働いているのである。

3章　語の特種化と分化

言葉には廣い意義領域をもつた general words と，ごく限られた狹い意義領域しか持たない specific words がある。たとえば light より brilliant, brilliant より更に incandescent は限られた意味を持つ。後者は前者より抽象の過程が高いとも言い得る。作者により比較的抽象の高い語の使用で滿足している者は少數の語を回數を多く使う傾向がある。我が古典の「おかし」「ゆかし」等が如何に多くの場合に使われているか，しかもその語の感じはその場面により讀者の可成り廣く自由な解釋に委ねているかを見よ。Hemingway 等も形容詞はごく原始的基本的の物に限つているので少數の語が何度も繰返えされる。James も初期に於ては總括的な語で滿足し，反復も敢えて厭わなかつたのであるが後期に至るにつれ表現は正確巧緻を求める余りに，特種語を特種語をと追つて行く。適當な語を見出し得ない所は修飾語を多く加えて合成的に自己獨創の句を作りあげる。このスタイルの變化がこの改作にも窺えるのは今迄あげて來た引例中にも既に明かであるが猶若干の考察を續けよう。

動詞では said の場合は前述の通りであるが常時坐歩の簡單な動作も場合に應じ次の如く特種な物に替えられる。

sat down → dropped to the bench（どかりと席に坐る），walk → prowl（うろつく），go away → melt away（消え失せる），walking about → hanging about（ぶらつく），goes about → tear about（押し歩く）

更に次の例では時間的に空間的に言葉は焦點を狹められて來る。少年 Randolf の夜更かし But her brother sits up till midnight. (53) は till two までに縮まり，Mrs. Costello が誇る that social sway which she exerted in the American capital (17) は全ニューヨークから from her

stronghold in 42 Street と42番街へ縮少するし，又 Daisy は通行人に the extremely pretty young foreign lady (45) と映じたのが woman of English race と限定される。

然し一番この根本的態度から大きな影響を受けるのは形容詞や副詞である。何故ならば此等の語は文に於ては多く名詞動詞の修飾語であり表現の精密さは第一に修飾語の増大となるのが常態だからである。次の諸例は一箇のごく普通な形容詞副詞が如何に改作で James 自身の創作した複雑な語に替えられるかを物語るであろう。

delicate (8) → offered such a collection of small finess and neatness.

quiet (35) → quite distractingly passive,

never jealous(62) → not formed for a troublesome jealousy.

common (18 vulgarの意.) → of the last crudity.

gravely (59) → with studied severity.

askance (7) → with a certain sacred obliquity.

pregnantly (57. 暗示的にの意) → as with a grand intention.

offensively (16) → with an effect of offence.

最後の四例は副詞の例であるがこの様に副詞を with-phrase で代用する例は非常に多い。形容詞を更に副詞で修飾している句の中には如何にも James 風の extraordinarily communicative and tremendously easy. (R.15) (非常に話好きで,恐しく寛いだ) delightfully irregular and incongruously intimate (愉快な程でたらめで，目茶に内輪同志氣分) と言つた様な對句的の面白さをねらつた物もある。ごく普通に見える語でも彼の作中隨所に出沒するイタリック文字，或は quotation mark 入りの語は警戒を要する。いずれもごく稀なその語の意味，或はその場限りの特種な意義を指定しているので，James 一個の twist (ひねり) が掛けられているのであり，イタリック，引用符等は要するにその特異性を認識せよと言う警戒信號の如き役を務める物である。改作には此等の語が殊に多くなつている。それ等の内より若干を示そう。

a youny American girl of so "strong" a type.(12.性格が鮮明 pronounced で同時に强氣である意を含めている)

This lady didn't feel she could "rest there" (52. 良い加減の所で鉾を改める意)

He had visibly something urgent—and even to distress—to say, which he scarce knew how to "place". (R. 79. どうやつて切出すか困つている意)

the most "distant" American girls (R.9 近寄り難い女)

But nothing would induce him to cut her either "dead" or to within any measurable distance even of the famous "inch" of her life. (R.75) (彼女を完膚なきまでにやつつけるとか，有名な鐵面皮の手應えのある迄傷ける氣にはなれない。)

いずれも容易に見える語に文脉場面から生ずる特別の荷を負わしている。最後の例などはやゝ作者獨斷の感あり一般の讀者には眞意の握捉に苦しむ事であろう。

James が初期に於ては比較的語彙が乏しく，同一語を何回も繰返えして平然としていた事，及び後期には極端な反動に出た事の一例證としてこの初版には實に多く Daisy smiled, Winterbourne laughed が現われる。少し氣を付けて讀んでいると彼等は四六時中にやにやばかりしている樣な感さえ與える。改版では此等多くの smile や laugh が色々の複雜な表情に分化して行く。

gave a little laugh (22) → quite crowed for the fun of it.

laughing still (22) → in the glee of the thing gave another little laugh (23) → proclaimed a gay indifference.

with a little laugh (25) → with a sound that partook for Winterbourne of an odd strain between mirth and woe.

she only stood there laughing (29) → she only remained an elegant image of free light irony.

smiling (30) → all lighted to her odd perversity.

with a little laugh (41) → with strained but weak optimism.

smiling intensely (51) → wondered to extravagance.

smiling shyly (43) → squirming in shy repudiation.

gave a violent laugh (52) → gave the rein to her amusement.

he was smilig (30) → in his face a vague presumptuous intelligence.

と言つた調子である。同じ語を繰返すのは潔としない（態とある効果を狙つて反復する手法については又後で述べる）爲に時には次の様な人工的な表現も生れるのである。

..... and then he had come in to his breakfast. He had now finished his breakfast ; (3.) R では二度目の breakfast を that repast に替えてある。その他眼鏡は二度目には that optical instrument となり his mustache は the ornament in question となる類である。改訂に當つては初版の一字一行を削れば必ずそれ以上の添加が行われるのであるが珍しく一行を削つたまゝである場所が一箇所ある。

she expressed a lively wish to go in the little steamer ; she declared that she had a passion for steam-boats(31). この；以下が全部削られている。いかにも原文を良く讀んで見ると，steamer, steam-boats と語こそ少しは異れ，steamer で行きたいのと steam-boats が好きだと言うのとは類似の反復に近い。彼の極端に重複を嫌う後期の文章眼からしてはこの程度の瑕瑾をも見逃し得なかつたのであろう。

4章　*Image* について

彼の初期作品には直截に物を言い切る爲に metaphor や simile はごく少いが後期には逆に非常に凝つた比喩を好む様になる。如何にして idea をimage に變えようかに多大な苦心を拂つている傾向も見られる。

the dusky traditions of Chillon made but a slight impression upon her (33) → grim ghost of C. loomed but faintly before her.

raised her eyebrows (50) → rather oddly rubbed the wrong way by this.

Mrs. Costello whose figure of speech scarcely went on all fours. (R.66. O になし) 彼女の比喩が突拍子もない位の意であろう。

It tapped, at a touch, the spring of confidence. (R.12. O になし) 自信のある話題に觸れてたちまち雄辯にしやべり出す事。

特に注目すべきは whiteness と flower に關するイメヂの多い事で，之は Daisy (雛菊) の名への連想であうか。彼女の弟の Randolph によれば彼女の名刺にのつている名は Annie P. Miller であるが常に Daisy で通つている，しからば Daisy とは彼女の取り裝わぬ自然の美を讃えた愛稱であろうし容易に白い花のイメヂと結び付くのである。

perfectly well-conducted young lady (49) → a wholly unspotted *flower.* (眞に無垢の花)

her brilliant little face (43) → her shining *bloom* (輝く花の顏)

Daisy turned away, looking with a small *white prettiness, a blighted grace* (R.64. のみ) (白い美しさ，虫ばんだ優しさ)

this was said after a little hesitation (8) → this *flower* gathered as from a large field of comparison. (廣い比較の畑から摘まれた花)

此等の花は又 Daisy が百花咲亂る flowering desolation known as the Palace of the Caesars.(67)を散歩する姿，又 beneath the cypresses and the thick spring-flowers. (76) に眠る彼女の墓への聯想にも繫がつて行く。

her shoulders (57) → her very *white* shoulder.

her charming eyes and her happy dimples. (47) → her charming *teeth* を追加。

to encounter your reproaches (42) → be riddled by your *silver* shafts.

These words were winged with their accent, so that they fluttered and settled about him in the darkness like vague *white* doves. (R.

74のみ)

この最後の美しい metaphor は彼の The Wings of a Dove (1902) への聯想もあろう。

一體に Daisy には清澄の雰圍氣が常に伴う。靜かな夜が好きで星月夜を氣仙の如く彷徨する (wandering about in the warm starlight like an indolent sylph 20), 或はコロセウムの月明に in the sinister silver radiance. R.75) 遊ぶ彼女の姿が心に强く殘る。着物は in white muslin (5), その聲は常に clear とか serene とか形容され, James の好きな pipe (44) (笛の樣な聲) と言う語も現れる。又その表情は as decently limpid as the very cleanest water (R.10) 清い水の如く清冽である。白い花のイメヂはそれ等の物と良く融合して此所に美しい Daisy の姿が生まれる。

今一つ注意すべきは繪畫に關するイメヂの多い事である。彼は青年期に本式に繪を習い後放擲したが繪に對する關心は常に持續けた。そして彼の後期の文に繪のイメヂの多い事は Mathiesen が注意している。(註 3)

The child was indeed *unvarnished* truth. (R. 11 眞相を打明ける, unvarnish は表面のニスを取去る事)

This *sketeh* of Mrs Miller's plea remained *unfinished*. (R.16. 母親の說明の終らぬ事)

Daisy at last *turned* on W. a more *natural* and calculable *light* (R.63 自然光を當てる)

so much more a work of nature than of art(R.68 Daisy の Velasquez の繪の前に立つ姿の形容である)

though it offered such a *collection* of small finenesses and neatnesses he mentally accused it of *a want of finish*. (R.10 Daisy を仕上げの完全でない繪と見る觀方)

5章 Americanism と slang の增加

James の所謂 American stories 或は international stories に登場する

アメリカ人には二つのタイプがある。(註4) 一は教養も高く歐洲の文化を身につけ既に完全に歐洲化した人物，後者は教養は余り高くないが活力に富み素朴な人物である。そして前者の語る言葉は殆ど英人と交つても米國藉を露わさない上品な時には sophisticate された言葉である。所が後者は素朴の性質を剝出しにアメリカ訛も俗語も平然として使う。International Episode の Westgate 夫妻の妻は前者で夫は後者に屬する，The American の Newman，更に極端な例は（テクサス訛の爲に折角の英國貴族との緣談を棒に振りそうになる）The Siege of London(1883) の Mrs. Headway 等は後者である。Daisy Miller に於ても Winterbourne, Mrs. Walker, Mrs. Costello 等は前者の型。それにはつきり對照して The Millers 一家の言葉づかいは後者である。James の國際小說では後者に屬するアメリカ人の多くはその戰い ——或時は歐洲人對米國人の，或時は歐洲における米人同志の戰い——の敗者となる。然し James は寧ろ敗れ去るタイプのアメリカ人の中に雄々しさ美しさを認めている樣に思われる。Daisy の敗北も又その一例であろう。

Miller 一家のアメリカニズムは既に初版に大分顯著に現われる。殊にひどいアメリカ訛を示すのは一番頑是ない Randolph である。Winterbourne との初会見に彼を fellow-countryman と認識せしめたのは

"Oh, blazes; its har-r-d!"

と pronouncing the adjective in a peculiar manner. (4) (R には divesting vowel and consonants, pertinently enough, of any taint of softness. となつている）したのから始つている。このアメリカ發音の反轉母音 r への關心は又後に

"Mother-r", interposed Randolph, with his rough ends to his words. (42)

となり現われる。彼の欲するのは any American *candy* (4) であり，彼は盛に Well, *I guess* you had better.(6) My father's rich, *you bet!* (9) 等の guess, bet を發する。Daisy も又 It's *some* mountain. (7) I never was *sick*, and I don't *mean* to be! He is *real* tiresome. (26) There was

a lady told her of a very good teachr. (10) の who の省略 They've *got goiny at* the piano (=start on a job) (56) 等の Americanism を發揮する。

所が改作には The Millers の Americanism と vulgarism の混合率が何かの藥の廣告ではないが數倍に増大される。そうする事により彼等は他の仲間から判然と異分子となり浮立つて來る。しかも Mrs. Miller が最もひどく vulgarism を使うのは会憎と彼女の行動が周圍から注目されている危機であつて，彼女は知らぬが佛であるが一座から離れた奇妙な存在となる。一體に彼女は改作では一段とカリカチュア化されて風采も滑稽に，容貌も下卑て，態度も間が抜けた愚かしい母親と成下つているが，彼女の言葉使いも一層それに拍車をかける。一體に James は後期に至つては会話に依つて話者の性格を書分ける關心を放棄したと言われるのであるが(註5)，この點だけは例外と言うべく改作では益々特徴が誇張されている。

Miller 一家の使うアメリカニズムの第一は I guess で，初版にある數例に更に八回程追加される。Pyles が英國の作家は米人を登場させるとやたらに I guess を濫發して事足れりと滿足して居る愚(註6)を嘲つて居るが James も余りこの方面の名手とは言い難い。その他の主なアメリカニズムの改訂は次の様な物である。例によりイタリックは加筆，下線の語が米語。

You wouldn't do <u>*most*</u> anything (=almost. 42)

I am going to <u>*go it on*</u> the Pinco (go it on=go right ahead. 47)

"It's going round at night, *that way*, <u>*you bet*</u>," (74)

You can't see anything here at night, (except when there's a moon!) <u>*without*</u> *the moon's right up*. (75)

(We have) *We've* seen places that (I should) *I'd* put a long way (before) <u>*ahead of*</u> Rome. (41)

I think Zürick is <u>*real*</u> lovely. (41)

殊に文法上興味があるのは一人稱の should を多く would に替えている事である。

I don't believe I (should.) *would* (40)

(I should) *I'd* want to write to Mr. Miller about it—(shouldn't you) *wouldn't you*? (24)

I (shouldn't) *wouldn't* have wanted……(73)

I know (I should) *I'd* like her (22)

She asked him if he was a "real American"; she (shouldn't) *wouldn't* take him for one. (8)

最後の should を would に代えたのは直接話法 I wouldn't がその儘間接話法になつた爲。此等の用法は總て Millers 一家專賣で，たとえば一人稱の would でも Winterbourne 等は I should like very much to know your name. (9) と使つている。

同時に全體が vulgar tone に近くなる。is not は殆ど ain't と改められ，He (doesn't) *don't* like Europe. (10) I've made Mr. G. promise to tell me, if (she doesn't) *Daisy don't*. 等の solecism にわざと修正している。

然し結局 James の人物の俗語方言の使い方は如何にも意識的で周邊から遊離している。完全に生活や階級と融合した巧みな俗語の驅使は彼の苦が手とする所であつた。彼は Mark Twain の Huckleberry Finn を the riot of the vulgar tongue (卑語の狂宴) と呼びながら猶その點にこそ the key to the whole of the treasure of romance (この美しい物語の全體を解く鍵) があると云つた。(註 7) 然しその樣な語に巧みな者は学校教育の洗禮を浴びない前の，その美しい響きに氣付かぬ人々に多い (precedent to the invasion, to the sophistication, of schools and unconscious of the smartness of echoes.) と言つているのは正に選民中の選民たる彼と，碌な学校教育も受けなかつた Twain との差を物語つていると云うべきであろう。

6章 文 章 論

今迄は主として語について述べて來たが次に文章論に入る。第一に氣付くのは原作は比較的容易な短い單文を並列して行く極めて平易な文章であつたが，

後期には彼は複文を主に複雑な構文を好む。その爲に文の單位は斷然長くなる。原作の數箇の單文を punctuation を取除いたり，關係詞を入れたりして一個の長文に組替えてある例が屢々ある。たとえば

……she quickly turned her head. "Well, I declare!" she said. "I told you I should come, you know," Winterbourne rejoined, smiling. (39)

これ以上平明な文はない樣なわかり易い文だが，一面どんな novitiate でも書けそうな文である。後期の彼は到底この樣な羅列型には耐え得ないらしく，次の樣に修正する。

……she quickly turned her head *with a* "Well, I declare!" *which* he met smiling. "I told you I should come."

二章で述べた樣に種々の傳達動詞を用いる以外に，会話を一箇の名詞扱いして上例の樣に with a で續けて行く。W. judged it becoming to address a few words to her mother—*such as* "——" (R.42) "——" *was all W found to reply.* (R.71) も同樣な技巧。更にその会話を which で引取つて行く。said, answered に當る所を with which, in response to which として次の文に連絡させる例も良く見る。

又一つの特徴は動詞的構文から名詞的構文に移つた點で，それが彼の後期の文を固く感じさせる。たとえば these shrewd people had quite made up their minds (that she was going too far) (67. 少し行過ぎた行動だと決める) → as to the length she must have gone.

whenever he met her (68) → on every occassion of their meeting.

同樣に分詞節は with phrase に替えられる。

blushing a little—a very little (16) → with the slightest blush.

smiling and curling his mustache (20) → with a laugh and a curl of his mustache.

a little embarassed (7) → with a slight drop of assurance.

この例は枚擧に暇がない程多い。

殊に彼の有名な澁滯逡巡するリズムの散文も多く現われる。この型は彼が性

來どもり癖の爲とも，それを口述して筆記させた爲とも說明されているが，要するに作者の語に對する自意識過剩 (over-consciousness) 又は穿鑿好き (scrutiny) から來る物であろう。

The shiny—*but, to do him justice, not greasy*—little Roman (R. 67)

It wasn't (exactly) *pointedly—what point, on earth could she ever make* ?—expressive.

It does not exist here. → *It has—in its ineptitude of innocence—no place in this system.* (R. 62)

此等はまだ複雜と言う程の構文ではないが，修飾語から被修飾語へ，他動詞から目的へと最も斷ち難い密接な聯關の推移の一瞬にも，彼の語に對する反省が働き自然に流れるリズムを中絶してまでも，——內の挿入句を入れないではいられないのである。文の全體の理解と言う面からだけ言えば，その間讀者は理解の足踏みをしているわけである。James の文が語解しがたい原因の一は此所にある。その樣な斷續文の極端な例は余り改作にもないが，Daisy Miller の Preface の次例の如きは良く特徵が現われている。わかり易くする爲に挿入に當る個所を假にかつこに包んだが，滑り出そうとする車を何回もブレーキを掛ける樣な介入が如何に多い事か。

The considerable little terrace there was so disposed as to make a salient stage for certain demonstrations on the part of two young girls, (children they, if ever, of nature and freedom) whose use of those resources, (in the general public eye, and under our own as we sat in the gondola,) drew (from the lips of a second companion, socially afloat with us,) the remark that there (before us, with no sign absent) were a couple of attesting Daisy Millers.

此等挿入の中にも又小い挿入が見られる通り幾つかある。そして結局言わんとする文の要點は「二人の少女が Daisy に似ていると連れの一人が言つた」と言う事である。その一番大切な事が最後まで保留される典型的な掉尾文 (periodic sentence) である。

7章　改作是非論

最後に結局殘つたのはこの問題であるが，私の他の改作は知らず Daisy Miller に關する限りは敢えて改惡であると言いたい。

その第一の理由としては既に二章の傳達句の件で述べた樣に彼は人物の会話の改造よりも寧ろ会話の後に作者の讀者への指令を精密にする事に焦點を置いた感がある。成程彼以前の多くの小說の樣に話の筋や人物から離れて作者が得意の人生觀や哲学を振廻す事はしていない。然し原作には無くとも結構賢明なる讀者には理解し得た人物の会話を，その会話自體はその儘にして，「それはこの樣な感情を籠めて言つたのである」「こう言つた理由は次の如くである」と一々作者が指圖している樣に感ぜられるのである。之は Flaubert の信條，作者は doit s'arrenger de façon à faire croire à la postérité qu'il ná pas vécu！(後世から見て恰も存在せぬ如く信ぜしめる樣に書け) を又彼の信條としたと云う彼の創作態度と相反する物と思う。

勿論小說は劇とは異るからその敍述や性格を科白にのみ委ねる必要はない，(事實前述の樣に彼は後半期には会話により人物の性格を描分ける努力を放棄したかの如く總ての人物が James ばりの獨特な会話をする。) だからと云つて作者の說明 comment にのみ終始すれば人物の實感が失われる。このヂレンマを解く法として彼が訴えたのはAなる人物の心情を寫すのにBなる人物の意識を媒介とする所謂間接描寫である。Daisy の場合も彼女の性格は主として Winterbourne を通じて觀察される。然し余りに作者の操り糸が判然と見えると Winterbourne は完全に作者の mouthpiece 化して，消えた筈の作者が正面に現われて來る感がする。

今一つの疑念は彼が The Art of Fiction (註 8) その他の文学批評論に於て力說した事の一つは subject と style の一致と言う事であつた。然らば彼の複雜澁滯するスタイルも，微妙な題材を說明する物として始めて意味がある筈である。所が Daisy Miller は改作によつても題材が一變したのでない事は度々述べた通りである。比較的平明なこの物語の不變の題材を全然異つたスタイル

で書修そうとする試み自身に何か無理な所があるのではなかろうか。同じ事を述べてもその表現は成程前と異り複雑に凝つている。Jamesのこのもつて廻つた手の混んだ表現を非常に高く買う人も多いが我々には次の様に書替えて果して幾ばくの利があるか疑いなきを得ない。

It mattered very little. (76) → The truth on this question had small actual relevance.

She would prove a very light young person (62) → It represented that she was nothing every way if not light.

if nocturnal meditations in the Colosseum are recommended by the poets, they are deprecated by the doctors (71) → if the nocturnal meditation thereabouts was the fruit of a rich literary culture it was none the less deprecated by medical science.

中には大袈裟な語を使つて滑稽味を出す目的と解されるのもあるが大して効果ありとも思われぬ。

G. hurried her forward (74) → G. was at present all for retreat. (専ら退却を志している)

Mrs. Miller was invisible (75) → Mrs. M. meanwhile surrendered to her genius for unapparent uses. (目立たぬ役に適した彼女の才能に耽つている)

この様に易しい事をむずかしく言う James の筆癖が昂ずると例えば H.G. Wells の James 式のスタイルを嘲笑して言つた hippopotamus picking up a pea. (河馬が一粒の豆を拾つている) とか, Maugham が皮肉つた People do not go away, they depart, they do not go home, but repair to their domiciles; and they do not go to bed, they retire.(註 9) 等の批評が生じて來る所以となる。(實際 Mr. Randolf has gone to bed. (30) が has retired for the niglt. と書替えられている。)

かくては Lynd の攻撃, 「James は言う事がなくなつたので新しい言い方に專心する」He ultimately found himself with nothing much to say

and concentrated his genius on elaborating a new way of saying it[註10] と言う批評も成程度まで賛成せざるを得なくなる。

Baker が Daisy Miller の一節を引用して作者の細心の注意の行屆いた名文と賞讃を惜しまぬ個所がある。[註11] それは Daisy の評價について Winterbourne と伯母の Mrs. Costello が意見を闘わす所である (p17—18)。

"I am afraid you don't approve of them", he said.

"They are very common," Mrs. Costello declared.

"They are the sort of Americans that one does one's duty by not—not accepting".

"Ah, you don't accept them?" said the young man.

"I can't, my dear Frederick. I would if I could, but I can't."

"The young girl is very pretty," said Winterbourne, in a moment.

"Of course she's pretty. Rut she is very common."

Baker の賞めている一つは approve と accept と似た様な語を使つて二人の立場の差を現わしている點である。approve とは「良しと見る」事，即ち道德的判斷であるが，accept とは「仲間に入れない」事で夫人に取つては價値觀よりも自分等の社交界に適應する人物か否かゞ問題となる。夫人は青年の approve を accept と言い替え，青年はその言い替えを敏感に反問している。之は良く作者の言葉に對するセンスの行屆いた文であると言うのである。今一つの點は青年は Daisy は common であるかも知れぬが pretty だと言う。所が夫人は pretty かも知れぬが common だと言う。この様に同じ言葉を使つてもいずれに重點を置くかで兩者の意見は永久に一致しない。之も言葉と言う物の性質を良く知つた文であると言うのである。所が会憎改作では丁度その賞揚された箇所が無殘に修正され accept は ignore と變えられ，二つの common の中後のは of the last crudity と余り明瞭でない別の語に變えられている。これでは Baker の引例がまずかつたのでなければ James の改作が適當でなかつた事となる。

勿論改惡されたばかりではなく改作により一層良く又は正しくなつた所があ

る。その個所を數箇あげて文章の神と一部にはあがめられている James に對し不遜にも批評がましい筆を弄んだ罪を贖おうと思う。

イタリー人の旅行從僕(クーリヤ)の無作法を攻擊する夫人は "I think he smokes"(18) と難ずるが如何にクーリヤでも煙草くらい喫んでも差支えはあるまい。之は改作では in their faces (面前で) と追加されているのは妥當。青年が始めて会つた Daisy を古城に誘つた時 Daisy に "With me?" と反問されると無躾と難ぜられたと思いあわてゝ "With your mother" (14) と言い替える。改作では "and with your mother" (貴女とそれにお母様も) となつているのは and 一語の追加で面白くなつた。又 Daisy が青年を母に紹介する所，舊版では單に "Mr. Winterbourne" と云つているが改作では Mr. Frederick Forsyth Winterbourne" と全部の名を誤らず一氣に言う。この方が數行前の "Oh dear, I can't say all that!" said his companion. と對照して Daisy の機智が鮮明になるし又 it was a wonder to W. that, with her commonness, she had a singularly delicate grace. と言う賞讃もうなずかれる樣になる。Randolph の言葉で "In America there's always a moon!" (75) はいくら子供の言葉でも變で之は "In America they don't go round by the moon." の方が無難。又 Winterboune の言葉で "Flirting is a purely American custom.' (59)はアメリカに對して氣の毒で之は American flirting is a purely American silliness. の改正も充分合點が行く。

結局功罪相殺して改版により改善されたとは思い難く，この意味で日本の諸版が舊版に殆ど據つている事に贊成する者である。

註

註 1. 舊新版の比較論は私の讀んだ範圍では Mathiesen : The Major Phase (Oxford, 1944) の中に The Portrait of a Lady を取上げた物がある。猶 James 自身，改作論については Roderic Hudson と Golden Bowl の序文に僅かに觸れているに過ぎない。 See, The Art of the Novel by H. James. (Scribner's N. Y. 1950), ed. by R. P. Blackmur.

註 2. C. Baker : Hemingway; The Writer as an Artist. (Princeton Univ. 1952) 8章

註 3. Mathiesen. ibid.

註 4. Mathiesen : The American Novels and Short Stories of H. James. (Knopf. N. Y. 1951)

註 5. Alexander Cowie : The Rise of the American Novel. (American Book Co. 1948) 16章

註 6. T. Pyles : Words and Ways of American English. (Random House)

註 7. H. James : Preface to Pandora.

註 8. Morris Roberts : The Art of Fiction and Other Essays by H. James. (Oxford. N. Y. 1948)

註 9. S. Maugham : Book and You.

註10. R. Lynd : The Return of Henry James. in "Books and Writers" (Dent and Sons. 1947).

註11. C. Baker : ibid p183.